
Floral Hearts ～ジャスミンのおくりもの～

STARLIGHT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Floral Hearts 〜ジャスミンのおくりもの〜

【Nコード】

N3829S

【作者名】

STARLIGHT

【あらすじ】

Floral Hearts 幼馴染編の最終幕「ジャスミン」。フリージアとリンドウでは語られなかった七年前の事件の真相が今、明らかに！！メインは主人公の妹、柚原奏。真実に触れたとき、奏とその幼馴染たちが辿り着く結末は・・・

序章 「困惑のReunion」(前書き)

このジャスミンの話は、フリージア及びリンドウ編の核となるストーリーです。

この話だけを見ても意味がわからないと思うので、先に前二編を読んだから、改めて読むことをオススメします。

序章 「困惑のReunion」

「はあ、今日も寒いなあ」

私、柚原奏は、手に息を吐きながら、家に向かって歩いていった。
今は12月の半ば。

うちの学園は15日から冬休みで、今日はその冬休み初日。

・・・だというのに、夏休みのとき同様、私はまた補習を受けることになってしまった。

「まったくもー、なんで学校には補習って制度があるんだろうねー！」

理不尽な怒りなのはわかってるけど、やっぱり嫌なものは嫌！

「お兄ちゃんとお姉ちゃんは、朝から買い物に行くって二人して出かけちゃったし、征ちゃんは受験勉強で引きこもってるし、つまらないよー！！！」

誰もいないことをいいことに、私は大声で叫んだ。

しかし、いくら叫んだところで現状が変わるはずもなく・・・

「はあ・・・帰ろ」

意気消沈した状態のまま、私は再び歩き出した。

「・・・ん、あれは・・・」

前方に、車椅子らしきものに乗っている人が見えた。何やら必死になっているけど、車椅子はいつこうに進もうとしていない。

近くまできて見ると、どうやら車輪が軽い溝に挟まってしまったようだ。

「どうしよう・・・完全に動かないや・・・」

乗っている人が、まいったといった声を出した。中学生くらいの男の子、かな？

（困ってるみたいだし、助けてあげたほうがいいよね）

私は車椅子に近づくと、力を入れて、ほんの少しだけ後輪を浮かせて、元の道に戻してあげた。

「大丈夫？」

車椅子の前方に回りこんで、男の子に声をかける。

「・・・あ、ありがとう・・・っ！」

男の子は戸惑い気味にそう言ったかと思うと、突然驚いた顔で、私をじっと見つめてきた。

「えっと・・・私の顔に、何か付いてる？」

そう聞くと、男の子はじっと見つめていたことに気がついたのか、

「ご、ごめんなさい」といって、目を反らした。

ちよっと引っかかったけど、気にしないことにした。

「この辺りは溝とかが多いから、気をつけてね。それじゃあ」

これ以上ここにいる理由もないので、私は男の子に背を向けて歩き出した。

「・・・あ、あの！」

ふいに、後ろから男の子に呼び止められた。

「何？」

「その・・・人違いだったらごめんなさい。あなたは、奏・・・先輩じゃないですか？」

「えっ？」

驚いた。私は別に有名でもないはずなのに、どうして彼は、私の名前を知ってるのだろうか？

「・・・どうして、私の名前を？」

私がそう問うと、男の子は途端に笑顔になった。

「やっぱり、奏ちゃんだ。久しぶりだね！」

「・・・えっ？」

私はさらに驚いた。久しぶり・・・ってことは、私の知り合い？

「覚えてないかな？ 僕だよ、ひわたりまっり日渡茉莉。七年前にちよっとだけ遊んだ・・・」

「っ！」

彼の名前を聞いた瞬間、何かが一瞬、頭の中を過ぎった気がした。初めて会ったはずなのに、何の根拠もないけど、私の脳がそれを否定している。

それともう一つ。七年前という言葉に、私はどうしてもあの時のことを思い出してしまう。

『孤独』に囚われていた、あの頃の私を・・・

「私と君が・・・七年前、に・・・」

不思議な出会い。

そして、七年前の事件。

今、全てが一つに繋がろうとしていた――――

第一章 「蘇る過去」

「初めまして、日渡茉莉です」

「ああ、奏から話は聞いてるよ。俺は柚原翔、奏の兄だ。よろしく」

「姫宮・・・あ、いえ、今は違いましたね。初めまして、柚原葉月です」

「いやいやいや、言い直す必要全くないよお姉ちゃん！」

「ええー、だって私たち、もう結婚・・・」

『してないよ（から）！』

今から数分前。

俺と葉月は買い物を終えて、昼飯を何にするかと考えていたとき、急に奏に呼び出された。

呼ばれた場所は、何故か例のリンドウの咲いていた花壇のある家で、呼び鈴を鳴らすと、奏と見知らぬ男の子が出てきたので更にびっくりした。

「それで奏、お前はこの日渡って奴と、昔知り合いだったのか？」

「それが、記憶にはさっぱりで・・・でも、日渡くんとは昔、会ったことはあると思う」

「根拠は？」

「勘・・・としかいえない。でも、日渡くんと帰り道に会って、名前を聞いたとき、確かに何か記憶めいたものが頭を過ぎったんだよ」
二人とも、嘘を言っているんじゃないことはわかる。わかるんだが・・・

「でも、変ですよ。奏は昔から翔君にべったりで、私達と会ってからは毎日のように四人一緒だったはずなんですけど・・・」

葉月の言うとおりの、奏が昔、俺や葉月たちから離れたことなどなかった。

「仮に俺達と一緒にいなかった時があつて、日渡に会ったとしても、記憶にすら残っていないってのは・・・」

俺と葉月が頭を捻って考える。

俺や葉月は確かに初対面だ。それは日渡と話したときに立証済みだ。だが奏は、昔に日渡と何度か会っているらしい。にもかかわらず、記憶に日渡の姿がない。

考えられるのは二つ。

一つは、日渡が嘘をついているという考え。

でもそれは、奏が勘だとしても否定しているので、可能性としては低いと思う。

二つ目、たぶんこれが1番有力だろう。

奏が何らかの強いショックによって、記憶の一部分が欠落、もしくは書き換えられている可能性。

そして仮にこの可能性が是なら、日渡と出会ったのは、やっぱり二人がいうように、七年前のあの頃だろう。

「奏、辛いのを承知で話してほしい。七年前のあの時、一体何があったんだ？」

俺は今、本当に辛いことを奏に聞いている。だけど、聞いておかなくちゃいけないことだった。

「・・・ごめん、本当に何もわからないの。前にお兄ちゃんたちに話したこと以外、何も覚えてないの」

そう言うと、奏は申し訳なさそうに俯いてしまう。

(・・・グー)

「ってそういえば、いつの間にか昼回ってたな」

こんな話の最中でも、人間の欲求には逆らえないものだ。

「そうですね。奏に呼び出されなければ、二人でそのままランチする予定でしたし」

「・・・呼び出してよかった。危うく一人で淋しく昼ご飯を食べる事になりそうだったよ」

「仕方ないですね。奏、ここで食えることにしましょうか」

「うん、了解だよ。日渡くん、冷蔵庫とキッチン、借りてもいいかな？」

「あ、はい、どうぞ」

家主の許可が下りたので、奏と葉月は二人して隣のキッチンへと向かっていった。

部屋には、俺と日渡の二人だけ・・・

「今のうちに、いくつか聞いておきたいことがあるんだけど、いいか？」

ちょうど奏がいないこのタイミングで、俺はどうしても確かめておきたいことがあった。

「奏と知り合ったのは、七年前の夏、学園の裏手の森の中で間違いないか？」

「・・・はい、そうです。奏先輩は、かくれんぼで誰も見つけてくれないから、と・・・その最中に何度か会いました」

「そうか・・・なら、」

次の質問をする前に、俺は一呼吸おいて自分を落ち着かせる。出来れば俺の考え違いであってほしいと、願いながら・・・

「お前が記憶している範囲でいい。奏と一緒にのときに、何が起こったんだ？」

――トントン

「翔君、数学の課題でわからないところがあるんですけど」

夜、といってもまだ9時くらいだが、葉月が洗い物を終えて俺の部屋を訪ねてきた。

俺はというと、机をペンでトントン叩きながらじっと白紙のノートを見ていた。

「・・・何してるんです？」

「ん、ああ、葉月か」

そこでもうやく葉月が来たことに気がついた。

「ちょっと昼間のことを、な」

「昼間・・・ああ、日渡くんのことですか。『俺の奏にあんな変な虫が!』ですか?」

「ちげーよ! 確かに兄としては気になるが、別に奏は俺の所有物じゃないんだから」

「・・・違うんですか?」

「いやいや、何でお前はそこに疑問を持つんだよ!?」

「私と奏、二人同時に我が物にしようだなんて・・・」

「してねえよ! 俺が欲しいのはお前だけだ!!」

そう言うってから、しまったと思っても既に時遅し。葉月はニヤニヤしながら俺を見ていた。

「仕方ないですね。翔君がそこまで言うのなら、所有されてあげましょう♪」

途端に年上目線の口調になった。

付き合い始めてから、誕生日が一ヶ月早いというだけで、時々お姉さんぶるようになった葉月。

そんな仕草も可愛いと思うのは確かなんだけど、それ故にからかわれるだけっていうのは釈だ。

「っ!?!」

俺は勢いよく立ち上がると、強引に葉月の唇を奪ってベッドに押し倒した。

「・・・っあ。もう、翔君、いきなりすぎます・・・」

「端からそのつもりだったんだろ?」

そう切り返すと、葉月は顔を赤く染めて視線を反らした。

それを合図に、俺は葉月の服に手をかけ・・・

「・・・」

「・・・翔君?」

「あ、いや・・・」

続く言葉が思いつかず、俺は一度手を離し、ベッドに座り直した。葉月も俺の様子を察してか、起き上がって俺の隣に座ってくれた。

「・・・今日、お前らが昼飯作ってる間、日渡から聞いたんだ」

「・・・」

「七年前の初夏、奏は一度・・・死にかけてるんだ」

「えっ？」

葉月は信じられないといった顔で俺を見てきた。

「ちょ、ちょっと待ってください。奏は私たちとずっと一緒にいたんですよ!? それに、そんな大怪我をしたのなら、私たちが気づかないはずがないじゃないですか!」

葉月の指摘は最もだ。でも・・・

「奏は死にかけたんだ。でも、本当に大怪我を負ったのは奏じゃないんだ」

そう、奏は無事だったんだ。

「・・・まさか」

俺は、日渡から聞いた話をそのまま葉月に伝えた。

「大怪我をして死にかけたのは、奏じゃなくて、日渡なんだ」

夜。

僕はベッドから身体を起こして窓から空を見上げた。

今日は快晴だったから、星がよく見える。

星明かりの中、僕は昼間のことを思い返していた。

奏ちゃんのお兄さんから聞いた話。

彼女に起きた、七年前のことと、最近のこと。

彼女の苦しみの発端は、間違いなく僕だった。

それなら、彼女があの中の時の記憶を覚えていないのは、幸いだったと言えるのかもしれない。

「少し寂しいけど・・・願わくば、奏ちゃんが記憶を取り戻さないことを」

僕は夜空に光るたくさんの星に、そう祈わずにはいられなかった。

第二章 「決意を新たに」

日渡くんと出会った次の日、私は「白の箱庭」に来ていた。
理由は、ただ気になったからだ。

自分の抜け落ちている記憶、彼との出会い、そして、私自身の病気。
確証はないけど、これらが全部、同日の出来事だとしたら・・・

「・・・なんてね」

そんな難しいことなんてどうでもいい。

日渡くん、私たちと話していた時、笑ってはいたけど、それが寂しさを隠しているのだということは皆気づいていた。

「やっぱりこのままじゃ、ダメだよ」

それから私は、日が傾く頃まで森を散策していた。

「・・・あれ、征ちゃん？」

家への帰り道、前を征ちゃんが音楽プレイヤー片手に歩いているのが見えた。

私はその背中に駆け寄って声をかける。

「お、奏じゃないか。久しぶりだな」

「たまに会ってるじゃん・・・どこ行ってたの？」

「ん、ちよつと煮詰まってきたからさ、気晴らしに散歩してきたのさ」

「わあ、何か征ちゃん受験生っぽいよ」

「ぼいじゃなく、受験生なんだ！」

「そだっけ？」

「こいつは・・・」

最近はある機会がずいぶん減ったけど、元氣そうでよかった。
お姉ちゃんがいつも気にかけてるから、あまり心配はしてなかった

けど、実際に会ってみて少しほっとした。

「・・・で、お前はどこに行ってたんだ？制服のままで」

「私も散歩だよ、裏の森を」

「1人でか？」

「うん、そうだよ」

「何でまた・・・」

「うーん、まあ何ていうか・・・ちょっとした自分探し、みたいな？」

「・・・何だそりゃ？」

「ちよっと昨日、そのー、いろいろとありまして・・・」

私は曖昧に返事をした。

これはあくまで私と彼の問題だし、何より受験で忙しい征ちゃんに、変な負担をかけたくなかった。

「まあ、お前が何をしていようと別にいいんだけどさ。あまりあいつらに心配させるようなことはするなよ。・・・といっても、今のお前なら大丈夫だろうけど」

あの日から、私はそんなに過保護にはされなくなった・・・もちろんいい意味で。

みんなから信用を得られるくらいには、成長できたみたいだ。

「わかってるよ」

だから、その信用を裏切ることのないよう、私は自分らしくいよう。そう、決めた。

「それじゃ、行ってくるな」

「うん、いつてらっしゃい。楽しんできてね。お兄ちゃん、お姉ちゃんをしっかりとエスコートしてあげるんだよ？」

「エスコートで・・・ん、まあわかってるよ」

「ホントに大丈夫かなあ・・・ってお兄ちゃん、時間時間！」

「えっ・・・お、やべっ！　じゃ、じゃあ行ってくるな」

携帯を確認しながらバタバタと出ていくお兄ちゃんを見ながら、私はふうと息をこぼす。

「さてと、オシヤレとかがダメダメなお兄ちゃんも無事送り出せだし、私も支度しなくちゃ」

さっきので散らばった靴を綺麗に戻して、私は自分の部屋へと向かった。

――12月24日

今日は、俗に言うクリスマス・イヴだ。

この日は毎年4人で集まって、1日パーティー騒ぎをするのが常だったんだけど・・・今年は違う。

お兄ちゃんとお姉ちゃんが恋人同士となった今、今日この日は二人きりで楽しむのが、世の中の定番なんだから。

・・・なのに二人とも、前日、私を氣遣ってなのか、例年通りにパーティーの買い物に連れていこうとするんだもん。

そりゃ寂しくないわけじゃないけど、そんな氣遣いを今更されたくはなかったから、半ば強引に二人でデートするように言いくるめたんだ。

「ん、こんなもんかな」

鏡の前で、いつものように髪を整える。

そして鏡台の引き出しから、水色のリボンを取り出す。

けれど私は、それをすぐには結ばず、手にとってしばらく眺めていた。

「ほら、奏。後ろ向いて」

「ん、お兄ちゃん、こう？」

「うん。それから、目をつむって」

「え、どうして？」

「どうしても。すぐ済むから」

「・・・うん」

「もういいよ。奏、鏡を見てみて」

「うん。・・・わぁー!」

「誕生日プレゼント。奏に似合うと思って。その・・・どう、かな？」

「・・・そっか、よかった。うん、どういたしまして」

「でも私、髪がまだ短いから、あんまり似合わない」

「そうだな・・・でも、髪がもっと伸びたら、絶対可愛いくて似合うと思うよ!」

「ほんと?」

「ああ、本当だ」

「うん、それじゃあ髪頑張って伸ばす。伸ばして、リボンをつけて、お兄ちゃんに可愛いって言ってもらおう!」

「お兄ちゃんにもらった、初めての誕生日プレゼント、だったんだよね」

懐かしい記憶に想いを馳せながら、リボンを身につける。

それから私は鏡台から離れて、机の上においてある鞆と携帯を取る。その時ふと、写真たてが視界に入ってきた。私が高校に入学して、幼なじみ皆で撮った写真だ。

「もう、1年になるんだっけ。早いなあ」

この一年、いろんなことがありすぎて、時間がこんなにも過ぎていたことをあまり自覚していなかったんだ。

私は写真の中のお兄ちゃんを見る。

この一年でお兄ちゃんは、随分変わったと思う。

優しいところはそのままに、何だか以前より、強くなった。

そして、変わっていくお兄ちゃんを見ている内に、私もどんどん惹

かれていったんだ。

私は視線を横へスライドさせる。

葉ちゃん・・・お兄ちゃんが好きになった人。

私の大切な、お姉ちゃん。

お兄ちゃんより優しくて、ある意味でお兄ちゃんよりも私の幸せを考えてくれていた。

何でそこまで私を第一に考えてくれるのか、薄々は気づいていた。だけど結局、私はその優しさに甘えてしまった。

その繰り返し、いつかお姉ちゃんを苦しめるのではないかと、頭ではわかっていたのにも関わらず・・・

そう・・・全部、私の我が儘。

だからこそお姉ちゃんには、もう柵に捕われず、今まで私のために自分を犠牲にしてきた分、幸せになってほしいと思う。

「・・・矛盾してるよね、やっぱり」

ただ一つだけ誤算があった。

私のお兄ちゃんへの想い、やっぱり完全には消えてないみたい。頭で納得していても、心が求めてしまう。

でも私は、この感情をもう表には出さない。あくまでも、妹として居続ける。

「自分で決めたんだ。どんな結果になっても、お兄ちゃんを好きで居続けるって」

後悔は全くしていなわけじゃない。

それでも私は、皆みたいになろう。

そう、誓ったのだから・・・

少し逡巡した後、私はリボンを解いて、引き出しへ戻した。

これは、私なりのケジメ。新しい私へと向かうための、儀式。

お兄ちゃんからもらった大事なリボン・・・今は大切にしまっておこう。

もしも、このリボンをまた付ける日が来るとすれば、それは私が『柚原奏』に戻ったとき。

つまり、本当の意味で、お兄ちゃんを諦め、お兄ちゃんの妹として帰ってきたときなのだから・・・

鍵をかけて家を出る。

風の当たる感じがいつもと違うように思えた。

きっと、髪を結んでないせいだろう。

私は髪を右手で軽く押さえながら、いつものように・・・だけど、ほのかに新しい感覚を覚えながら、学園への道を歩き始めた。

途中、日渡くんの家の前で一度立ち止まって、彼の部屋の方を見る。

「きつと・・・ううん、絶対に思い出すから」

改めてそう自分に言い聞かせて、私は再び歩き始めた。

やがて学園が見えてきた。

校門前で待ってる友達二人に声をかける。

『・・・誰？』

・・・酷い。いくら髪型を変えたからって、二人そろって言われると結構ショックだよ・・・

「何で髪結んでないくらいで私だってわからないのさ・・・」

右隣には、セミロングの茶髪で、見た目どおりスポーツ会系の『高こ

うさかゆき
坂由希』

左隣には、お姉ちゃんと同じ黒髪ロングで、ちよつと引っ込み思案な『柊ひいらぎ紗弥香』

映画館に向かう道すがら、両隣を歩く二人に私はジト目を向ける。

「だからゴメンってば」。でも奏、結んでるときとは随分印象違うよ？」

「そうだね。こっちの方が、ちよつと大人っぽく見えるかな」

由希に続けて、さやちゃんも言葉を紡ぐ。

「そういえば、二人の前で髪を解いたことってなかったっけ・・・」
修学旅行とかも別の班だったから、確かななかったかもしれない。

「でもさ、何で急に髪型変えたのさ？」

「・・・うん、まあ何とも話しづらくはあるんだけど、さ」

私はそこで一度言葉を区切って、歩く足を止めた。

私の数歩先で足を止めて、二人が振り返ってくる。

「強いて言うなら、私が私に戻るため、かな」

そう呟きつつ、視線を二人に戻して笑って見せる。

「・・・そっか」

やや間があって、由希から短い返事が返ってきた。

由希とさやちゃんは、私が中学に入って以来の友達だ。付き合いは、お姉ちゃんや征ちゃんの次に濃い。

だから、今までの私のことも知っている。お兄ちゃんへの気持ちも、お姉ちゃんへの憧れも、あの事件以来の、私自身の決意も・・・。
その上で私を氣遣って、時には相談にも真剣に乗ってくれる二人には本当に感謝している。

私があの時決断できたのも、二人が密かに相談に乗ってくれたおかげだったのだから。

「よし、それじゃあ行こっか！」

私は明るくそう言って、歩みを再開する。二人も笑って私に続いて歩き出した。

（本当に、私って幸せ者だね。こんなにも、私を助けてくれる人がいるんだから）

今更面と向かってありがとうを言うのは恥ずかしいから、そっと心の中で告げておく。

さて、何はともあれ、せっかくのクリスマス・イヴ。

親友二人と一緒に、今日という日を全力で楽しまなくちゃね！

窓の外は雪がチラチラと降っている。

もう数日前から積もってるくらいだから、それほど感激はしないけど、一応ホワイトクリスマスになった。

「そっか・・・もうクリスマスマスの季節なんだなー」

お母さんはこの時期になると、とても忙しいから深夜まで帰ってこない。

だからどうというわけじゃないけど、やっぱり寂しくはあった。

「そういえば冷蔵庫の中、もうあんまり入ってなかったっけ・・・」
退屈してたし、少し運動するには丁度いいと思い、僕はかけてあったコートを羽織って車椅子を動かした。

そして、玄関まで辿り着いたとき、ふいにチャイムが鳴った。

「はい」

僕は返事をしつつ、引き戸を開けた。

「よっ、君が茉莉くんかい？」

突然フランクに話しかけてきた男の人。正直面識がなかった。

「あの、どちらさまですか？」

少し戸惑いがちに質問する。

「俺か？俺は奏たち三人の兄貴みたいなもんだ。いわゆる幼馴染ってやつさ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3829s/>

Floral Hearts ～ジャスミンのおくりもの～

2011年10月5日20時20分発行